

はばたき21

今だから考えるパートナーシップ

通信

2012.3
No.23

特集 はばたき21 インタビュー

“共生社会をつくる” セクシュアル・マイノリティ支援全国ネットワーク

“ミナ汰”さん “翔子”さん

こんな近くにあったパートナーシップ



「はばたき21」10周年プロジェクト

1) 交流会

2011年9月18日(日)

設立から現在に至る「はばたき21」の関係者80名が集った交流会。

2) アート展「表現する女たち」

2011年10月15日(土) ~

11月6日(日)

女性13名による「ものづくり」を紹介。「女性にとってのアートは、作り、使う喜びであり、生活に息づくもの」というメッセージを、作品を通して伝えた展示会。

3) 学習会

つながなおそう！地域

「はばたき21」で考える

災害と女性

2012年3月17日(土)

講師 浅野 幸子さん

男女平等、人権の視点から、防災やまちづくりなど、地域の取り組みに活かすための方法を探る講座。



「カミングアウトは 信頼の証。 自分の家を教えるよ うな感じです。」 パートナーシップ×



セクシュアル・マイノリティ

“共生社会をつくる”セクシュアル・マイノリティ支援全国ネットワーク

代表 ミナ汰(原 美奈子)さん(右)
翔子さん(左)

活動紹介

1. 国や自治体への働きかけ
今回の震災では、パートナー関係が未認定のため、お互い連絡がつかない時の対応や、避難所での性別違和感がある方の居場所の配慮等、細部に渡る要望書を提出した。
2. 電話相談を中心とした支援事業
セクマイホットライン(毎週月曜18時～21時フリーダイヤル(0120-37-7867)携帯可)で相談受付。同性間DV等の支援にあたる。
3. 啓発・教育
資料開発及び講演活動。市民講座を始め、支援者(相談員や教師等)向け講座も開催。ラジオパープルのセクシュアル・マイノリティ部門(毎月最終水曜)も担当。

震災の時、誰もが真っ先に案じたのは、家族や友人の無事でした。混乱の中、親族でないゆえ自分の大切なパートナーの家族とみなされず、連絡がつかない辛さ。

身近なコミュニティで、社会的無理解に苦しみ、命を落とす人や体調を崩す人がいることを知り、「セクシュアル・マイノリティのことをきちんと取り上げられる社会にしたい」と20代後半にコミュニティ活動を始めた代表のミナ汰さん。「共生社会」を目指し、様々な活動を行っています。

セクシュアル・マイノリティとして感じる日常生活での困難さ、カミングアウトの大切さ、パートナーシップとは何かを、翔子さんと共に、印象に残る言葉で語っていただきました。

テレビや小説で膨らんだイメージとの違い。

翔子…(以下翔子)共生ネットで皆さんとお会いすると、必ず「レズビアンの人、今日初めて見ました」との感想をいただきます。テレビでも小説でも、セクシュアル・マイノリティに対してイメージがすごく膨らんでいたたり、決まっていたりします。同じ職場の隣で働いているかもしれ

性別ですっぱり分けられればいいってだけじゃない。

翔子…身体の性が女性で、見た目はそんなに男っぽくない友人は、性別違和感のある人で、女性トイレには入れない。いつも共用トイレを使っているのですが、障害者用と書いてあると、「ダメだ。障害者用トイレって書いてある。いや、コンビニで入る」と我慢しているのです。それは、ズルしようとか、わがままで入ろうとしているんじゃないというメッセージでもあるわけです。「トイレ！」と言っても、すぐには行けない。

い。何でもそうです。今ここで話していることも、ずっと話せない。何事も、「えっと、今は…だから」とか考える。どちらかにあてはめた方がいいのか、この程度は主張できるかな、とか。
ミナ汰…(以下ミナ汰)例えば自分は見た目が女性だから恋愛話をすると、聴き手は皆相手は男と思込んでいます。でも女性と付き合っている場合、それをいつ言うか、言わないのか、絶えず考えながら話さないと普通に話ができないんです。
翔子…性別違和感があるけれど周りに知られたくない人は、この程度なら

ボーイッシュですまされる、腕時計と靴までいったらばれるぞなど、いつも考えている。見た目から考えることも、癖になっている。
ミナ汰…全部性別がくっついていていないじゃないですか。何でも、眼鏡にだってね。
社会にアンテナがないと全然違う方向に行ってしまう。

ミナ汰…「反抗してるんだ」と言われてきた。でも全然反抗しているのではないのです。

翔子…「制服が嫌だ、着たくない」が子どもだからうまく説明できなくて、「学校に行きたくない」になっで、「学校に行きたくない」になっでしまふ。不良じゃないのに、不良と言われてしまふ。自分でも「あれ？みんなと同じにできない自分って、不良なのだろうか」と思い、そのまま突っ走ってしまふ人もいます。でも、もともとは性別違和感について話せる人がいれば、何の問題もなかったのに。

あるニュースで、喧嘩や万引きする子の更生施設の特集があり、「性別違和感について話ができる人も、ちゃんと養成しているのだから、ここは？」と思ひながら見ていたんです。ただ単に不良が不良じゃなく

なるための「人はな…」という話を、ずっとしていた。それでも何かプラスになると思うけど、そう言われている最中も、ガムテープで胸を抑えていて、ガムテープを取る時に、皮も一緒にめくれるというのに。「どこ見てるんだ、そこをまず！そこなんだよ！」性別違和感があつて苦しければ楽にならない。

反発しようと思っているのではなく、そのままの自分でいられないから「それはなぜなの？」と考える。「なぜ自分が着たいものを着たいと言えないの？」「なぜ私が好きな人を隠さなければならぬの？」というところから、疑問に思う。受け皿や解決策がないから、「生まれ直すしかないのかな」と思って死にたくなったり、そういうことなの。

ミナ汰…社会的な無理解なんです。理解のある人達もたまにはいます。でも無理解な親や友達もいるわけです。ルールレットみたいなもので、うまく当たればいいですが、狭い社会なので、特に子どもは動きが取れなくなってしまうのです。

カミングアウトには、
人それぞれに物語が
あります。

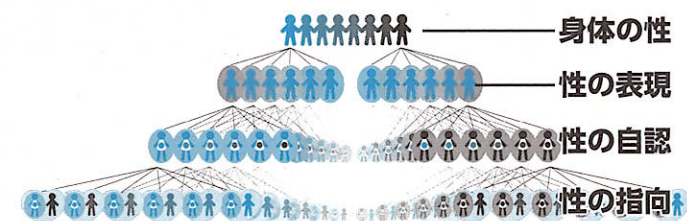
セクシュアル・マイノリティとは

同性愛者、両性愛者、性同一性障害(GID)を含めた性別違和や、DSD(性分化・発達障害/インターセックス)をもつ者をはじめ、「男女」の性別区分や、それに基づいた社会制度の枠組みにあてはまらない人々を指します。人間の性のあり方は、身体の性・性自認・性の指向によって分かれており、複雑で多様なことがわかっています。

身体の性 生物学的な性	性の自認 心の性	性の指向 好きになる性	
男	男	女	異性愛の男性
女	女	男	異性愛の女性
男	男	男	同性愛の男性(ゲイ)
女	女	女	同性愛の女性(レズビアン)
男	女	男	性同一性障害のある異性愛の女性
男	女	女	性同一性障害のある同性愛の女性
女	男	女	性同一性障害のある異性愛の男性
女	男	男	性同一性障害のある同性愛の男性

参考：石川大我(2011)「ゲイのボクから伝えたい「好き」の？がわかる本」太郎次郎社エディタス

身体の性が男性型・女性型に一致せずに生まれてくるインターセックス、自分の性別に違和感をもつトランスジェンダー、性指向に性別が問題にならないバイセクシュアルなど、身体の性・性自認・性の指向は明確ではなく、グラデーションで存在しているため、いくつかの組み合わせができるのです。



DVD「セクシュアル・マイノリティ理解のために～子どもたちの学校生活とところを守る～」共生ネット制作

どこか尊敬できるところがある。あ・うんの呼吸。

自分の能力の延長に、「あいつにこういうものを描いてもらえるかなあ」と考えている。結果、自分が思い描いているものより素晴らしいものが出来上がる。作る楽しさ、+αの部分がある。



オオニシ ワタルさん(左)

おおにし かんじ
大西 幹治さん(右)

2人とも松山出身。小・中・高と同じ学校に通っていた同級生。「将来は絵の仕事をしたい!」という夢を抱き、卒業後は東京に上京。同じ専門学校に通い、デザインの勉強をする。最初に入社した会社も一緒。その後独立し、別々にフリーで仕事をしていたが、平成23年ゲーム・ライト・エルイーディーを設立。印刷物を中心にデザインを行っている。

2人で仕事をすることに

1人で仕事をしていると相談できる相手がいないので、方向性を間違ってしまうことがあるんです。その点2人だと意見を出し合いながら切磋琢磨できる。打ち合わせ中にイメージが沸くことも少なくありません。同じテーマでも違うものができるので、気づかされることは多いです。また、自分がうまく動けないところを相手が得意にしているので、負担が分散するというメリットもあります。得意分野や慣れている作業も、分担しながらできるので仕事のクオリティも高くなっていると思います。

仕事のパートナーとして

相手に対して要求するのではなく、

お互いが成長できることが理想です。相手の良いところをどうフォローして、さらに良い物に仕上げるか。自分自身が相手の力になれるよう意識しながら行動しています。

2人の夢

夢は自分達のオリジナルキャラクターを世に送り出すこと。ずっと自分達の好きなことを続けていれば、きっと何とかなる。これからは、自分達が楽しめるような仕事ができるようになります。18歳で東京に出てきて、最近故郷や地元のことを意識するようになりました。地元で協力できるよう、松山を紹介するなど、愛媛に関する仕事もしたいと考えています。

お互いを尊重し、お互いの存在に感謝しあえる関係が理想。

自分にできないことは尊敬する。やりたいことを認めてくれるので、自然体で、自由にいられる。

結婚したこと

自分自身のことでも、1人だとわからないことはあります。夫がいることで、今まで自分でも知らなかった自分に出会う機会も増えました。夫の前で涙を流す自分がいたり、素直に甘える自分がいること。以前は独りで頑張っていた自分がいましたが、今は本来の自分に戻ってきたような気がします。夫にも同じような発見はあると思います。40代、50代で新しい自分発見ができるおもしろさ。とても新鮮です。

人生のパートナーに思うこと

お互い自然体でいられるのが一番。気を使わず、私が私でその場に立ってられる。私の不器用なところを含め、全てを認めてくれる夫の存在に感謝しています。

それぞれ「自分にはできない」と感じている点がお互いの好きなところ。自分にできないことは尊敬し、やりたいと思うことは尊重する。後押ししてくれる人がいると、その人のためにも頑張りたいと思える。お互いそういう存在でありたいと思っています。

これからの夢

昨年、両親の金婚式を祝いました。お互いのやりたいことを尊重?しながら50年。私達には両親ほど一緒に過ごせる時間はないかもしれませんが、「楽しい老後を過ごしたいね」と話しています。お互いの強みを活かし、人のために何かできればと思っています。



結婚一周年記念にレストランにて

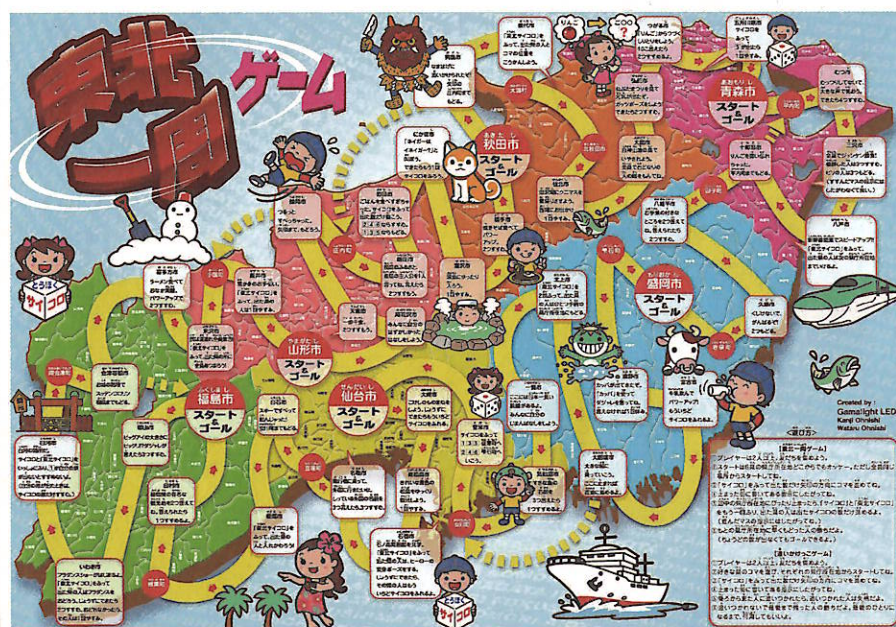
きむら よしこ
木村 良子さん(左)

東京・世田谷区在住。高校卒業後、早く自立をしたいと念願の外資系IT企業に就職。27年勤務した後、転職。キャリアカウンセラーを目指し勉強を開始。並行して、東京都の就職支援の仕事に携わる。また、マリッジカウンセラーの試験に合格、セミナー講師を務めるなど、カウンセリングの引き出しを広げた。20歳の頃、会社友人の同期であった夫と知り合う。30代でゴルフをきっかけに付き合いを再開。平成22年結婚。夫は50代、自身は40代でお互い初婚。

こんな近くにあったパートナーシップ

夫婦や仕事仲間との穏やかなつながり。災害時の緊迫した状況での思いがけない人とのつながり。それぞれパートナーシップについて伺いました。

岩手県に住んでいる級友が震災で被災。何かできないかと思っていた時、不便な避難生活を強いられている中、子ども達が手作りのスゴロクで楽しそうに遊んでいるという記事を目にし、自作のスゴロクを作成。被災地に送った。



震災

おおもり あきこ
大森 亜希子さん

東京都江東区出身。結婚後は、福島県いわき市に在住。高校生と小学6年生の子ども、夫、夫の両親と同居。学童クラブの指導員。地震発生後、勤務先の学童クラブがある小学校に向う。保護者に子ども達を引き渡すまで、一緒に近くの中学校に避難していた。夫は町の消防団に所属。

●3月11日 地震発生

高台の自宅は、親戚、以前住んでいた海側のご近所の方々、家族、総勢21名の避難所となった。

●3月12日 福島第一原発1号機 水素爆発

自宅は30km圏内。「今すぐ避難しろ」と夫に言われ、45km離れた高校に着の身着のまま避難。

●3月14日 原発3号機が水素爆発

夫が「もっと遠くへ避難しろ」と言ったが、ガソリンがなく動けない。

●3月15日 東京の実家へ出発

夫が、近所の人の車やトラックからガソリンを調達。子ども2人、親戚の子どもとその母親、知人の孫の大学生の6人で東京に向う。

「私達は後から逃げるので、先に行きなさい」

お年寄りに送り出されて、一般道、山道を走り、時速5kmの凄まじい渋滞の中、12時間かかり東京に避難。

何もない避難所で

食料は、持ってきたものと、朝晩に配布されるおにぎり1個またはパン1枚。被災していない山側の地域の人達がおにぎりを持ってきてくれたり、交流のあった白河市の人達が物資を運んでくれました。何も情報が入らず、何が起きているのかもわからない。とにかく、ライフラインがまったくない中で、中心となって避難所を回してくれた人達や、夫を含む町の消防団の人達には感謝しなければなりません。

また、義理の母には助けられました。「焦っても仕方ない。落ち着いて行動しなさい」という母の言葉を聞くと、家が流された人達も、ほっとするようでした。

隣近所のお付き合い

我が家はもともと人がたくさん集まる家。人口が少ない町なので、以前住んでいた海側の近所の人達とも、ずっと付き合いはありました。東京に比べると、近所の子どもからお年寄りまで、年齢問わず交流がある地域だと思います。

一番大変なのは、職場でのセクシャルマイノリティのフォロー。

翔：職場では、自分でセクシユアリティを進んで言いたいというより、何か調べられたり、追い詰められて言わないといけないことが多い。

ミ：尾ひれがついて、おもしろおかしく言われているところで、打ち消すためにどうしたらいいのかということなのです。自分はこれからどうやってカミングアウトをしていくべきなのか、無視するべきなのかという場合に、1人ではなかなか判断できない。その時に「こういう例もあったよ」「もし何か問題があったら、我々もお話に行くこともできるよ」と、バックアップしながら、本人の選択肢を広げていきます。カミングアウトするとき相手には必ず「どこまでは言つてよくて、どこからは言わないでほしい」と言う。言わないと相手にはわからないから。

安心してカミングアウトできることは、どんなに大事か。

ミ：カミングアウトには、プライバシーが守られなければいけない。ちゃんと尊重されるべき。カミングアウトしたら急に、「おい、お前、そのオカマ」みたいな態度を取られてしまったら、後悔するわけです。

いる。本当はみんなそうありたいのですが、追い詰められて、何も言わないで辞めてしまう場合もあります。やはり、カミングアウトするということは、そこできちんと対峙しているということ、向き合うことだと思っています。

性別を超えたパートナーシップって、大人になると作りにくい。

ミ：「肩を組んで、仲良く支え合える異性の友達がいる人、手を上げてください」と言うと、手が上がらない場合が多い。パートナーシップというのは、夫婦だけじゃなくて、もっと友情や仲間意識があつていいと思うのですが、非常に制限されていると思う。なぜ、一杯飲んで異性だとか何かなくちゃいけないのか？全てが性のブラックボックスに押し込められるのとても窮屈な社会だと思う。もっとフランクに話せる社会を目指したい。我々のような性別がクロスしている者は、そのところはすごく得意なわけです。みんな結構性別が偏っているのが、この社会の特徴ではないかと思う。その辺をなだらかにしていくことで、例えば暴力や夫婦間の問題がだいぶ緩和されることもあると思うのです。

男女雇用機会均等法のガイドラインに、その人のセクシユアリティがどうであれ、平等な取り扱いをしなければならないという規定が入っていないといけない。



ちょっと性が絡むと、性の奔放と誤解する人たちが。

ミ：女性が異性愛者じゃないとわかった場合に、性暴力を振るう男性もいます。「治してやろう」とか言われることがある。自分も上司にカミングアウトした時、性的な嫌がらせを受けました。いい人なのですが、カミングアウトしたとたん豹変して、何でも言つていいと思つてしまふ。セクシユアリティの話をすると、急に心を許したと誤解してしまふ。けれども、何でもありではない。上司も全てをぶちまけて、「妻には絶対言わないで！」みたいな。強すぎ

フランクなパートナーシップは、すごく大事にしていきたい。

ミ：親子関係を超えたきちんとしたパートナーシップ、もたれあいじゃなく、家族間のちゃんとした関係。これがないと、ストレスをぶつける相手だったりしてしまう。子どもや高齢者の虐待もこれで起きています。ひずみを全部そこで解消すればいいみたいになつてしまふ。そうではなく、問題は外に出していき、みんなで解決してもらふ。家の中でもちゃんとパートナーシップを組む。特に同性の世帯というのは姓だって違いますしね。そういうことをしていかなないと、うまくやっていけないと思う。それぞれの親にも、子どもにも理解してもらわなくてはいけない。そういうことを考えると、本当は社会の人間関係のあり方というのは大事だなと思います。

自分の何かを託したいのが、身内じゃないまったく他人のこの人。

翔：セクシユアル・マイノリティであるところから、「おや、これはおかしいぞ」「これはどうなっているの」と、みんなに起きているかもしれない不便さに気づくことができます。パートナーシップについても、自分が好きな人や配偶者という意味

るんですね。性の抑制が。ちょっとでも性の話が出ると、はじめてしまふという問題がある。

翔：男性に限らず、女性も「ゲイなんだ。じゃ私とすれば」と結構大胆に誘惑をする。

1との関係にも出てくるし、自殺企図やリストカットにもつながる。性自認が違うことで、様々なギャップに落ち込んでしまふことがあるので、ケアが必要なのです。

大丈夫って思える場所を探して。

ミ：ゲイに対する女性のセクハラもよく聞きます。会社でも、困っている人は結構いるんです。

翔：若い子たちは、「大丈夫」という気持ちを求めるために、人生をかけてカミングアウトをしている。みんなきつとそうで、私達はここからスタートしているけれども、どんな人にとつても「自分のことを言つて大丈夫なんだ」という瞬間が必要。「こういうところに困っている」とちゃんと話せて、大丈夫って思える場所が増えていけば、ずいぶん生きやすくなると思います。

カミングアウトとはどういうことであるかを伝えていきたい。

翔：単純に「女性だからあうセクシユアル・ハラスメントと一緒にしてよ？」と言われることが多い。違うの。女性だからというだけじゃない。「レズビアンです」と言つた途端にやられるということは、レズビアンであることがセクハラの原因としてあるので、それは二重にも三重にもなってくる。例えば、「何で子どもを産まないんだ」とずっと言われて、追い詰められる。「もう無理。自分が何者であるか言わなくては生きられない」「レズビアンと言ふしかない」と、さらにいい攻撃材料を手に入れたと相手は思い、悪化する。ミ：実は単なる「いじめ」であり、止めなければいけない。暴力の記憶というの残るので、ものすごく深いトラウマになっている。パートナ

ミ：カミングアウトというのは、「今度遊びに来て」みたいな。必ずしも全てを明け渡したわけではなくて、友人を招き入れるような、扉を開けるような感じ。そのことで、何か質問があつたらしてもいいという、きつかけです。そういう意味でカミングアウトすることは、とてもいいこと。自分にとつても相手にとつても。お互いをすごく肯定して

だけではなく、私達だから最初にしたのは「血縁だからじゃない」ということ。自分が付き合う相手とは、養子縁組しなければ一緒にできない。「自分の何かを託したい人が、親戚とかではなくて、外から見たらまったく他人のこの人なんだ」ということを、どう伝えればいいのかと思うたのがきっかけ。「夫なんか全然わからず屋で、自分が高齢者になつた時、身の回りの世話もさっぱりできそうにない。隣のおばちゃん

んの方が全然やつてくれるし、いろいろ言つておきたいわ、この人に」と思つていても、世の中そうできないと聞いている。お互い「何かあつたら頼むね」と、身内に限らず当人同士が合意の上で支え合える関係が、昔は多分あつたと思う。親子、恋人、夫婦という関係性に限らず結べるということが、生きる知恵、豊かに生きることにつながるのではないかな。

何か一つ問題を抱えていると

いうことは、

何か一つつながりを

持つ可能性を

持っているという

こと。



ミ：横浜市で一番地域活動しているのですが、少しずつ顔見知りになつて、町に行くと「こんにちは」「やあ、ミナ汰さん」と、すごくつながりができるんですね。実は、何も問題がないことのほうが苦しいことつてあります。よく訴えが来るんです。「私はマジョリティに属していると思つていますが、あなた達みたいに、目に見えるこれというものがないから、すごく苦しい」と。何か一つ持っているということは、傷でもあり、大変でもあるけれども、結び目のきつかけになる杭みたいなもの。そういうものを見つけて、それを活かした連携を作つていくことが、新しい形のパートナーシップになるのではないかなと思います。

2011男女平等推進フォーラム講演会 「震災で見てきたこと～女が目線・男が目線～」レポート

情報誌編集委員 市村

講師に^{しんすご}辛淑玉さんをお招きし、東北大震災の経験を通して見てきたことを伺いました。

災害にみまわれて避難する過程で、一人で生活するのが難しかったり、コミュニケーションが十分でなく孤立しがちな人は取り残されてしまう。

それは老人、障害者、病人、外国人などにあること。また、避難した先でも、避難所という限られた空間の中で、一番弱い人へストレスや感情のはけ口が集中してしまう。普段の生活の中で、インフラが整っていればお互い気にしないで済むことが、どうしても気になってくる。はけ口を求めている人もまた弱い人であることを、辛さんは優しく見つめています。しかしその行為ははっきりと「止めるべき」と断じます。

この講演の中で、「こうすれば止められる」と示されることはありませんでした。一人ひとりが「自分の弱さ」と向き合い、お互いを人として尊重しようという気持ちを持ち続けていく中に、それぞれの解決法が見えてくるのではないかと思います。



講師：辛淑玉さん

台東区立男女平等推進プラザ「はばたき21」



交通機関

- JR山手線・京浜東北線「鶯谷駅」南口 徒歩約15分
- つくばエクスプレス「浅草駅」A2出口 徒歩約5分
- 地下鉄日比谷線「入谷駅」1番出口 徒歩約8分
- 銀座線「田原町駅」徒歩約12分
- めぐりん「生涯学習センター南」・「生涯学習センター北」共に徒歩3分

編集・発行 台東区総務部人権・男女共同参画課 男女平等推進プラザ
〒111-8621 東京都台東区西浅草3-25-16 生涯学習センター4階
TEL 03-5246-5816 FAX 03-5246-5814

開館時間 午前9時～午後10時
E-mail habataki21@taitocity.net

編集委員 市村・榎本・加藤・鈴木

編集後記

「この1年を振り返れば、3月11日の被災が強く思い出されることでしょう。あつてほしくないことですが、改めて人と人のつながり“絆”を感じたことと思います。そんな中、プラザ10周年記念交流会が9月18日にありました。プラザ立ち上げに関わった方をはじめ、久しぶりに顔を合わせた喜びの中、この場でも絆を深められました。(情報誌編集委員 榎本)

台東区の男女平等を推進する キャッチコピーコンテスト

優秀賞受賞作品

今年度7月に実施した“台東区の男女平等を推進するキャッチコピーコンテスト”に応募頂いた96作品の中から、8月の選考会で「優秀賞」に選ばれた3作品です。

わたしんち イケメン・イクメン
台東夫婦

たいとうに、堂々と。

「女のくせに」って「男のくせに」って
どなんくせ?

主催：台東区の男女平等を推進するコンテストチーム
共催：台東区立男女平等推進プラザ「はばたき21」

はばたき21通信

23号

は公募の区民が企画編集しています。
皆様のご意見、ご感想をぜひお寄せ下さい。

はばたき21通信は区役所・区民事務所・図書館・区内公共施設・都内女性センターなどで配布しております。お持ち帰りいただけます。